

Q5

今学期に入ってから全く授業に出てこない学生がおり、気にかかったまま時間が過ぎていきます。どのように対応するのがよいのでしょうか。

A5

長期欠席には、さまざまな理由や背景が考えられます。周囲の友人などに様子を尋ねても、具体的な状況がわからないときには、長く放置せず、まずは可能な範囲で学生の状況を把握するようにしてください。一部の授業だけでなくほとんどすべての授業について同様に欠席が続いているのか、課外活動への参加があるかなど、学内での適切な情報共有により、ある程度学生の状態を把握することが可能になります。

その学生が、いわゆる**不登校**や**ひきこもり**の状態にあると思われる場合には、昼夜逆転の生活をしていることも多いので、まずメールで様子を尋ねるか、時間に配慮して電話をかけるなどの連絡を試みてください。本人が応じれば、そこから緊急性を見定めて次の対応を考えます。睡眠や食事が摂れないような状況が数週間以上続いているか、話し方や話の内容に不自然さや違和感がないか、などが判断の材料になるでしょう。本人が一人暮らしで、全く大学に出てこられないような状況であれば、できるだけ本人の了解を得て家族に連絡を取り、現状を知らせて対応への協力体制を整えることも大切です。

緊急性が高いと判断されたとき、たとえば希死念慮が強いとか、寝食を含めた最低限の身の世話が全くできていない、ずっと独り言を言っているなど、病的な印象のある場合には、学生相談室、あるいは精神科クリニックなどの専門機関への相談を勧めてください。本人が動けない場合は、教職員の方からご連絡ください。また、緊急ではないが深刻であると判断されたとき、すなわちひきこもった状態が長期化している場合（明確な基準はありませんが3~6か月以上を一つの目安としてよいかと思えます）には、公的な相談窓口として各自治体の保健所や精神保健福祉センター、NPO法人などの民間機関があることを家族に伝えてください。なお、専門機関でもそれぞれに対応の範囲が違い、本人が出向けなくても相談ができたり、訪問支援を行ったりしている機関もあるので、電話等で事前に確かめると安心です。家族が少しでも安定し余裕を持てると、即時の問題解決につながるわけではなくとも、本人にとってもプラスにはたらくことが多いので、適切な相談先を探す手助けなど、家族を支える関わりも非常に大切です。

そこまで深刻ではなく、しばらく休養を取ることで回復し、学業に復帰していけることもあります。その場合も、ただそのまま放っておくのではなく、本人の方から連絡を取りたいと思ったときには誰にどのように連絡すればよいのか明らかにしておき、本人が求めれば手助けをする準備がある、というメッセージが伝わるようにできるとよいでしょう。授業には出席できなくても大学には出てこられるなら、学内で何かしらの継続的な人間関係を持つことが大きな支えになります。本人に参加の責任がかからないような、ゆるやかな居場所があることが有用な場合もあり、たとえば学生相談室で開かれている定期的なグループプログラムなども活用できるかもしれません。

社会的な活動からひきこもり休むのは、そうすることが今その人にとって必要だからこそ、とも言えます。長い目で見れば、しばらく休んでも大学生の間にしっかりと態勢を立て直す方がよいこともあるでしょう。また、本人自身「このままではまずい」と感じながらも動けず、不安と焦りでさらに消耗していて、周囲が解決を急ぐと、わずかに残っているエネルギーまで奪ってしまうこともありえます。休んでいることを否定的にとらえ過ぎない広い視野を持つことが、かかわる教職員に求められていると言えるでしょう。